

コミュニケーションへの積極的な態度を 育成する外国語活動の指導方法

— 児童の伝え合おうとする意欲を引き出す授業の工夫 —

荒 野 泰 宏¹

小学校外国語活動において、コミュニケーションへの積極的な態度を育成するには、児童が外国語を注意深く聞き、自ら思いを伝えようとする意欲を引き出すことが重要であると考えた。そこで本研究では、必然性のある場の設定と方略的能力を意識したコミュニケーション活動の工夫を行い、その効果を検証したところ、コミュニケーションへの態度の変容が確認できた。

はじめに

平成23年度より第5、6学年で年35単位時間の外国語活動が必修化された。小学校学習指導要領解説外国語活動編（以下、学習指導要領解説）における外国語活動の主なねらいは、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことであり、このねらいは、次の三つの柱から成り立つとしている。一つ目は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」、二つ目は「外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」、三つ目は「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」である。（文部科学省 2008 p.7）

平成20年1月、中央教育審議会から示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」において、小学校外国語活動では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目標として行うことが適当だ」としている。

平成21年に文部科学省から発表された「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査（児童用）」では、英語の授業で楽しいと思うことの項目において、75.1%の児童が「英語のゲームをすること」に楽しさを感じている。しかし、「英語で友達と会話をすること」に楽しさを感じている児童は、38.9%である。英語のゲームは、ほとんどが英語の決められたセリフのやりとりで構成されていることからすると、児童は、ゲームをすることの楽しさを感じているが、英語のやりとりに楽しさを見出すまで至っていないことがわかる。このようにコミュニケーションへの積極的な態度の育成が求められている一方で、その育成が十分でないことが考えられる。

これまでの自身の実践を振り返ると、授業は教師主

導で、挨拶－チャンツ－ゲームの練習－ゲーム－振り返り－挨拶という展開で行うものが多かった。聞くこと、話すことなどのスキル面については、慣れ親しませることができたが、「コミュニケーションへの積極的な態度」の育成に至るには不十分であったと感じている。それは、児童はゲームを楽しんでいたが、それ以上の相手への働きかけがみられなかったからである。

そこで、児童の伝え合おうとする意欲を引き出す授業の工夫をして、コミュニケーションへの積極的な態度を育成する外国語活動の指導方法を研究した。

研究の内容

1 研究構想

(1) コミュニケーションへの積極的な態度とは

学習指導要領解説では、コミュニケーションへの積極的な態度を、「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのこと」（文部科学省 2008 p.7-8）と定義している。

大城（2008 p.46）は、コミュニケーション能力とは以下の四つの要素から構成されているという考え方が最も広く受け入れられていると述べている。

- ①文法能力（文や文章を作り出す能力）
- ②社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）
- ③談話能力（文レベルではなく文章の構成に関わる能力）
- ④方略的能力（語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）

そして、大城（2008 p.45-46）は、その一つの方略的能力の観点から、「コミュニケーションへの積極的な態度」とは、「単語がわからないから、そこでコミュニケーションをストップしてしまうのではなく、表現方法を工夫して、語彙以外の手段を使ってでも意図

1 南足柄市立南足柄小学校

研究分野（授業改善推進研究 外国語活動）

を伝えようとする」と述べている。

これらをもとに、本研究では、コミュニケーションへの積極的な態度を、「相手への理解」「伝える意欲」「コミュニケーションに対する実感」の三つの項目で捉えることにした。そして、その三つの項目を、さらに具体化して目指す姿を設定した。

【相手への理解】

- ・話す人を見て、聞いている。
- ・話を聞いて、うなずいたり、首を横に振ったりしている。
- ・話を聞いて、返事したり、聞き返したりしている。

【伝える意欲】

- ・相手を見て、話している。
- ・相手に伝わる声の大きさを話している。
- ・ジェスチャーなどを交えてなんとか伝えようとしている。
- ・相手からの問いかけに対して、自分の意思をはっきり伝えようとしている。

【コミュニケーションに対する実感】

- ・コミュニケーションをとったとき、喜んだり、困ったりしている。
- ・日本語の大切さを改めて認識している。

(2) 事前の意識調査から

この目指す姿をもとに、所属校の第5学年児童110名に事前の意識調査を行った。

ア 相手への理解

「英語を聞くときにどのようなことに気をつけていますか」の質問では、「話す人を見て」が70%、「聞き返す」が31%であった。このことから、英語を聞くときに、相手の方を見て聞こうという意識はあるものの、聞き返しをして相手を注意深く理解しようという意識があまりないのではないかと考えられた。

イ 伝える意欲

「英語を話すときどのようなことに気をつけていますか」の質問では、「相手の方を見て」が64%、「声の大きさ」が57%、「ジェスチャーを使って」が27%であった。このことから、英語を話すときに、声の大きさに気をつけて、相手の方を見て話そうとする意識はあるものの、ジェスチャーを使って、自分の意思をわかりやすく伝えようとする意識はあまりないのではないかと考えられた。

ウ コミュニケーションに対する実感

「友達との英語のやりとりに楽しさを感じていますか」の質問では、楽しいと回答した児童は40%で、授業での英語のやりとりに楽しさを感じている児童は半数に満たないことが分かった。

しかし、「外国人が英語で話しかけてきたらどうしますか」の質問では、「身振り手振り、知っている英語でなんとかする」「日本語で答える」「英語で受け答える」などの自分で対応しようという回答が、合

計71%もあった。そういった思いを伝える必然性のある場面では、コミュニケーションを図ろうとする意識があると考えられた。

(3) 研究仮説

事前の意識調査から、必然性のある場面では、コミュニケーションを図ろうとする意識があるものの、様々な手段を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとしていないということが分かった。

これらを踏まえ、次のような研究仮説を設定した。

外国語活動の指導において、以下の2点に着眼した指導を行えば、児童の伝え合おうとする意欲を引き出すことができ、コミュニケーションへの積極的な態度が育成されるであろう。

(1) 必然性のある場の設定

(2) 方略的能力を意識した活動の工夫

2 研究の方法

(1) 必然性のある場の設定

ア 情報に差がある活動

高橋(2009)は、「本来コミュニケーションは、すでに対話者双方が理解していることに対しては行わない。対話者との間に、コミュニケーション・ギャップが生じている時に、コミュニケーションを図ることに意義がある」と述べている。そこで、活動の中で一方が情報を知っていて、もう一方は知らないという情報に差がある状況を作り出し、知らない情報を集めないと解決できない課題を与える。そうすることで、相手と何度もやりとりしようとする意欲をもたせることができ、コミュニケーションを図らなければならない必然性が生まれてくる。

イ 困難な場面の設定

Ellis(2003)は、学習者のアウトプットを後押しするには、コミュニケーション活動中の教師の言葉がけ(投げかけ)が必要であると述べている。コミュニケーション活動中に、教師が英語で「One more time」等の言葉がけ(投げかけ)をすることで、意図的に児童を困らせる場面をつくる。その結果、コミュニケーション活動が単なる覚えた英語のフレーズのやりとりの場ではなく、外国人と話をしているような現実味のある場にするができる。

(2) 方略的能力を意識した活動の工夫

方略的能力とは、「語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力」であるが、本研究では、「知っている英語や簡単な英語で表現方法を工夫し、ジェスチャーなどを使ってコミュニケーションをなんとかして続けていく能力」とする。

ア つなぎ言葉の指導

つなぎ言葉とは、接続詞と同義に使用されることが多いが、本研究では、「会話をつなぎ簡単な言葉」とする。英語のやりとりの中で、児童がつなぎ言葉を使

うことができれば、そのやりとりはより現実的になり、コミュニケーションの楽しさを実感できるであろうと考えた。例えば、聞き返すときに使う英語表現一つに慣れることで、相手の思いを繰り返し聞くことができ、注意深く相手を理解することができる。

イ ジェスチャーの指導

ジェスチャーとは、身振り手振りのことであるが、本研究では、身振り手振りに加え、相手の方を向いたり、うなずいたり、顔の表情に気をつけたりすることもジェスチャーの一つととらえていく。コミュニケーションを図る上で、そういったジェスチャーを使うことができれば、より自分の思いを伝えやすくなり、より注意深く相手の話すことを聞くことができるようになるであろうと考えた。

3 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間 平成24年10月3日～25日

対象児童 第5学年 3学級 110名

授業時数 5時間(各学級)

単元名 「英語でスポーツクイズをつくってALTと楽しもう」

単元の目標 外国のスポーツについて知り、進んでスポーツクイズを出したり、その答えに反応したりすることができる。

単元の展開

時間	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
0分	①あいさつ ②フラッシュカード(スポーツ)				
3分	コミュニケーションについて話し合う。	つなぎ言葉とジェスチャーの練習 That's right. / No. / Close. / One more time. / More. / Less.			
8分	教師とALTのだすスポーツクイズを楽しむ。	スポーツクイズを考える。	クイズに必要な英語を調べて、道具を準備する。	クイズの練習をする。	クイズ大会を楽しむ。
40分	①振り返り ②次時に向けて				

(2) 授業づくりの工夫

ア クイズ作りで情報に差をもたせる

クイズのテーマは、ロンドンオリンピックが行われたこともあり、児童が興味・関心をもてるスポーツにした。クイズの問題は「What sport is this?」と「Who is this?」のどちらかを出题するようにした。児童がALTにヒントを一つずつ出して、答えに導くことになるが、相手がもたない情報をどのような方法で伝えようとするか、互いの情報の差を埋める過程で、児童は意欲的に伝えようとする姿勢を示すと考えた。

クイズ作成の手順は、第1時では児童のクイズ作成の参考になるように、教師とALTがスポーツクイズを児童に出题した。

第2時では、6～7人のグループに分かれ、グループごとにクイズの問題とヒントを日本語で作成した。6～7人で話し合い、一つのクイズを完成させる活動を通して、仲間と協力して完成させたいという思いがもてるようにした。「仲間と協力して」という中に、自然とコミュニケーションが生まれていく。

第3時では、第2時で作成した日本語の問題とヒントを英語の文に直した。その中で、「わからない英語はALTに聞く」という場を設けた。この活動で、「自分で英語を調べられた」という実感をもつことができ、英語がより身近になり、「これは英語で何と言うのだろう」という意欲につなげることができる。

第4時では、第3時で作ったクイズの問題とヒントが相手に伝わるようにグループごとに練習する時間を設けた。「よりよいものにしたい」という気持ちをもって練習し、自信をもってクイズ大会を迎えられるようにした。

そして第5時では、グループで作成したクイズをALTとJTEに出題する形式でクイズ大会を開いた。

イ 聞き返しや問いかけによる困難な場面の設定

クイズ大会で、児童の出题に対し、ALTとJTEは簡単な英語で聞き返しや問いかけをして(第1表)、練習したとおりに進行することができないような場面を設定した。あえて困難な場面を設定することで、児童はこれまでの知識や経験、ジェスチャーを駆使し、なんとか応えようとする必然性が生まれると考えた。

第1表 クイズ大会で使われた聞き返しや問いかけ

聞き返し	One more time. / Pardon? / Big voice.
問いかけ	Famous player? / Good player? First letter? / More hints?
その他	I know. / I don't know. / Oh, I see.

ウ つなぎ言葉とジェスチャーの指導

困難な場面を切り抜けるための方法として、つなぎ言葉とジェスチャーの指導を行った。

まず、第1時でコミュニケーションについて話し合い、「コミュニケーションは言葉のやりとりだけで行われるものでなく、表情やジェスチャーでも成立する」という意識付けをした。さらに、「どのような言葉を知っていればコミュニケーションが図れるのか」ということから児童に必要なつなぎ言葉を考えさせ(第2表)、第2時からのつなぎ言葉とジェスチャーの練習の意欲づけをした。第2時から、つなぎ言葉とジェスチャーに慣れ親しませるために、カード当てゲームを行った。

第2時の数字当てゲームでは、一人3枚ずつ数字のカードをもち、自分の持っているカードから1枚選んで、「What's this?」と問いかけ、相手の答えに対し、正答なら「That's right.」、誤答なら「No.」だけでなく、「Close.」「More.」「Less.」などのその答えに適した受け答えをして、相手の答えを導くものであ

る。その際、言葉だけでなく指で上を指したり、下を指したりするなど、ジェスチャーも使うように意識させた。第3時から、カードにスポーツカードを1枚混ぜ、そのスポーツにあったジェスチャーを自分で考えて使わざるを得ない状況にした。第4時、第5時と1枚ずつスポーツカードを増やし、最終的には3枚すべてスポーツカードにした。児童にとってジェスチャーを使う必然性が生まれ、ジェスチャーに対する抵抗が少なくなると考えた。

第2表 本単元で取り上げたつなぎ言葉

返答	That's right. / No. / Close.
聞き返し	One more time.
ヒント	More. / Less.

4 検証授業の結果と考察

考察は、検証授業における授業づくりの工夫が、授業において児童の伝え合う意欲を引き出せたかどうかという点を中心に行った。

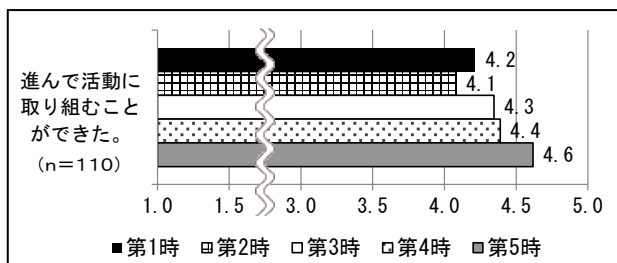
(1) 必然性のある場の設定の効果

ア クイズ作りによる活動に対する意欲の変化

今回、クイズ作りをさせたことは、児童が活動に対して意欲を持つ上で概ね有効であった。

このことは、授業後の振り返り「進んで活動に取り組むことができましたか」の平均値が、第1時より第5時の方が高くなっていることから判断できる（第1図）。

第1図は、「進んで活動に取り組むことができましたか」の項目に対する平均値のグラフである。授業後の振り返りは、項目ごとに、1が「できていない」、5が「できている」の1から5で自己評価させた。第1時は、教師主導で行われ、児童は教師の出すクイズを楽しんだ。第2時から第4時で、クイズ作りを行った。第5時は、自分たちで作ったクイズをALTとJTEに出して、クイズ大会を楽しんだ。つまり、第1時は、これまで通りの教師主導のコミュニケーション活動であったが、第5時は、自分たちで作ったクイズによるコミュニケーション活動である。



第1図 進んで活動に取り組むことができました

また、クイズ作りが活動に対する意欲をもたせるとともに、クイズ大会に向けての伝える意欲を引き出したことが、授業の振り返りの自由記述から判断できる。注目した点に下線を引いた。

授業の振り返りから

児童A

第3時： クイズを作るとき、英語を調べるのが難しかったけど、英語が楽しくなってきた。

第4時： 英語になれてきたから、あとは、ALTにうまく伝えられるかが心配。だから、家でも練習してみたいと思いました。

イ 聞き返しや問いかけによる伝え合う意欲の変化

クイズ大会において、ALTやJTEが聞き返しや問いかけをしたことは、児童の相手を注意深く理解しようとする意欲を引き出す上で有効であった。

このことは、JTEが「Please first letter?」と問いかけをした際の児童の対応から判断できる。

児童B : Hint 3. Nadesiko Japan team.

JTE : Famous player?

児童B : Yes. Yes.

JTE : Please first letter?

児童B : …

児童全員 : (グループ同士で顔を見合い無言)

児童C : 頭文字かな?

JTE : Yes.

児童C : さ。

JTE : Thank you. That is さわ ほまれ.

児童全員 : That's right.

最初は意味が分からなくて戸惑っていた児童が、頭文字であることに気づき、コミュニケーションを続けることができた場面である。授業後、このグループに、なぜ「first letter」が分かったのかを聞いたところ、児童Cは「JTEのジェスチャーを見ていたらなんとなく分かった」と答えた。相手のジェスチャーや言葉を注意深く聞いたからこそ、コミュニケーションを続けることができたと考える。

また、クイズ大会において、ALTやJTEが聞き返しや問いかけをしたことは、児童のジェスチャーなどを使って自分の意思を伝えようという意欲を引き出す上でも有効であった。

このことは、ALTが「One more time.」と聞き返しをした際の児童の対応から判断できる。

児童A : Hint 3, Russia.

ALT : One more time.

児童A : Japan. (上を指さしながら) Big. (両手でロシアの国の形を表した)

クイズの答えは、サッカーの本田圭佑選手である。児童Aは、ヒント3でロシアと言ったが、ALTに聞き返された。国の名前を、ジェスチャーで伝えようとはなかなか思い浮かばないものであるが、児童Aはジェスチャーを使いなんとかロシアを伝えようとしている。また、クイズ大会でのALTとJTEの聞き返しや問いかけによって、クイズ大会が単なる英語の発表会ではなく、コミュニケーションを図る場になっていたこと

も児童の授業の振り返りから判断できる。注目した点に下線を引いた。

授業の振り返り

自分の言葉を ALT が一生けんめい考えていることで、こっちもとまどうけど、「もう一度」とか言ってくれることで、少しのコミュニケーションだと思った。

(2) 方略的能力を意識した活動の効果

ア つなぎ言葉とジェスチャーを使ってコミュニケーションを図ろうとする意欲の変化

単元で、カード当てゲームを取り入れたことは、つなぎ言葉やジェスチャーなどを使ってコミュニケーションを図ろうとする意欲を引き出す上で有効であったことが判断できる。

そのことは、第2時の授業の振り返りの自由記述から読み取れる。注目した点に下線を引いた。

授業の振り返り

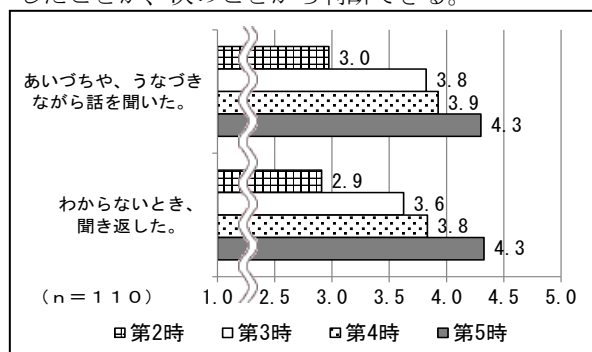
○これからちょっとずつつなぎ言葉をおぼえて、ALT などの外国人と、英語のつなぎ言葉を使ってしゃべってみたい。

○ジェスチャーを使うとよく伝わるのがわかった。これから、日常でもジェスチャーを使っていこうと思う。

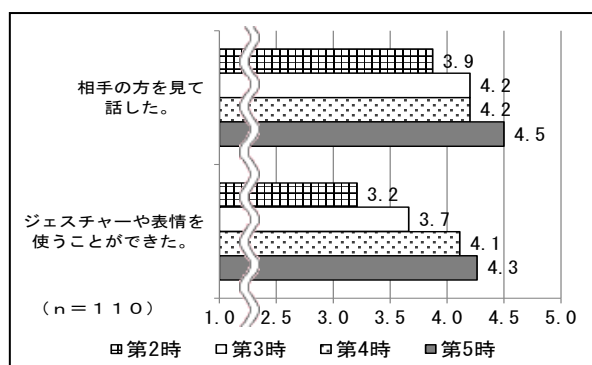
○つなぎ言葉を使うと、すごく話がかみあって、話はずんで、話が楽しかった。コミュニケーションが取れたような気がした。

イ「聞くこと」と「話すこと」の態度の変化

また、つなぎ言葉とジェスチャーの指導をしたことは、コミュニケーションを図る態度にも変容をもたらしたことが、次のことから判断できる。



第2図 「聞くこと」に関する自己評価



第3図 「話すこと」に関する自己評価

第2図は、授業の振り返りの「聞くこと」に関する項目の平均値のグラフである。ここから、第2時以降、相手の話を聞かるときに、あいづちや聞き返しを使うことが多くなったことが分かる。

第3図は「話すこと」に関する項目の平均値のグラフである。ここからは、第2時以降、児童が話をするときに、相手を見て、ジェスチャーを使って話すことが多くなったことが分かる。

そして、実際のクイズのやりとりの中で、つなぎ言葉やジェスチャーを駆使して、やりとりをしていることが、次のクイズ大会の様子から判断できる。

児童全員	: What sport is this?
児童A	: Hint 1. It's fast.
JTE	: First?
児童A	: Fast. Fast. (ジェスチャー)
JTE	: OK. OK.
児童B	: Hint 2. It has a racket.
JTE	: One more time.
児童B	: It has a racket. (ジェスチャー)
JTE	: More hints.
児童C	: Hint 3. Gesture. (ジェスチャー)
JTE	: OK. I know. The answer is tennis.
児童全員	: Close.
JTE	: Badminton.
児童全員	: That's right.

クイズの答えは、バドミントンである。児童Aと児童Bは、JTE の聞き返しの後に、ジェスチャーを交えて相手に伝えようとした。JTE が、テニスと答えた後、「Close.」とつなぎ言葉を使うことができていた。

また、つなぎ言葉やジェスチャーを使ってやりとりをした後に、コミュニケーションに対する実感を高めたことが、次のクイズ大会後の感想から判断できる。

- ・意外な反応があり、思い通りにいかなかった。
- ・意外と難しかったけど、楽しかった。
- ・ジェスチャーを使ったら理解してもらえた。
- ・日本語が使えないと伝えるのが難しいと思った。

5 成果と課題

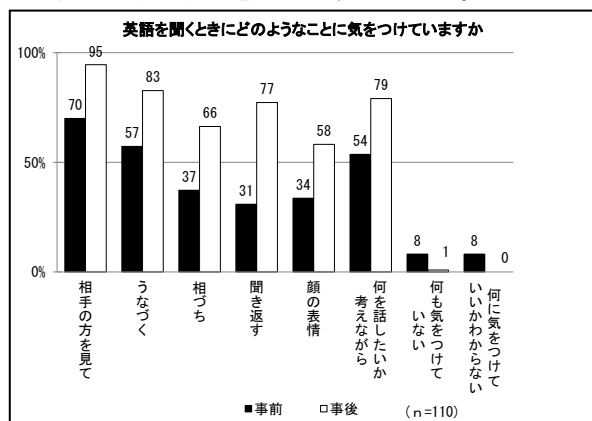
(1) 研究の成果

本研究が目指す姿に近付いたかどうかを、検証授業前後の意識調査から分析した。

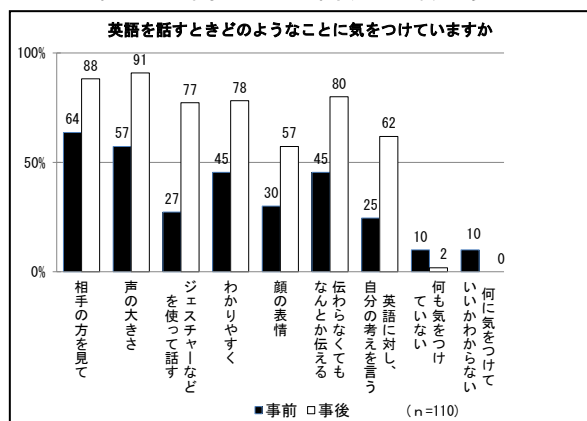
「英語を聞かるときにどのようなことに気をつけていますか」という質問に対して、気をつける項目が増えている（第4図）。そこから、英語をただ聞くということから、諸感覚を使いながら相手を理解しようとする意識に変化している。

「英語を話すときにどのようなことに気をつけていますか」という質問に対して、気をつける項目が増えている（第5図）。ただ言葉だけで伝えるということから、体や目、ジェスチャーなどを使って、自分の意

思を伝えようとする意識に変化している。



第4図 聞くことに関する意識の変化



第5図 話すことに関する意識の変化

また、「コミュニケーションと聞いて思いつくことを自由に書いてください」という質問の回答から、コミュニケーションは、ジェスチャーなどの非言語的なものも使って行われるものであるという意識に変化していることが判断できる（第3表）。

第3表 コミュニケーションに対する意識の変化

	検証授業前	検証授業後
児童A	会話をする。	ジェスチャーなどを使って、分からない英語でもどうにか考えて、理解して、相手に伝えられよう。

そして、「友達との英語のやりとり」に楽しさを感じているかの質問では、楽しいと回答した児童は、事前調査では40%であったが、事後では63%になった。

これらの結果から、授業において「必然性のある場の設定」と「方略的能力を意識した活動の工夫」に着眼した指導を行うことは、コミュニケーションへの積極的な態度の育成につながるといえる。

今回、児童が非言語的な手段を使ってコミュニケーションを続けようとする場面が見られたことは、大きな成果である。その要因は、活動に情報の差をもたせただけでなく、困難な場面も設定して必然性を生みだしたことである。英語でヒントを言ったがALTに聞き返され、児童は英語が通じないことに戸惑うが、それが逆に英語のやりとりに現実味を与え、ジェスチャー

などを使って伝えたいという意識につながった。

外国語を通じたコミュニケーション活動において、事前に支援をしっかりとした上で、児童が自ら進んで乗り越えられるような少し難しい課題を用意する指導方法は、コミュニケーションへの積極的な態度を育成する上で大変有効であるといえる。

(2) 今後の課題

コミュニケーション能力の素地は、三つの柱で構成される。本研究では、その一つであるコミュニケーションへの積極的な態度の育成をテーマにした指導を行ったが、言語や文化についての体験的な理解と関連を深めることはできなかった。今後の課題は、三つの柱のバランスを考えながら、コミュニケーションへの積極的な態度の育成を中心にした指導を、2年間の外国語活動の授業に、どのように体系づけるかである。

おわりに

本研究で、コミュニケーションへの積極的な態度を具体化した姿は、小学校の話し合い活動の話し方・聞き方に共通する。外国語活動でのコミュニケーションへの積極的な態度の育成とともに、他教科での言語活動の充実を関連させる必要がある。今後も、学校生活全体で言語活動の充実を図りながら、コミュニケーションへの積極的な態度の育成が図れるよう、指導の工夫を重ね、継続して研究に励みたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2012. 4. 19 取得)) p. 64
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版社
- 高橋美由紀 2008 「小学校外国語活動におけるコミュニケーション能力の育成」(高橋美由紀『これからの小学校英語教育の構想』アブリコット) p. 15
- 松川禮子・大城賢共編著 2008 『小学校外国語活動実践マニュアル』 旺文社

参考文献

- 文部科学省 2009 「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査(児童用)」（http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2010/12/06/1299796_1.pdf (2012. 4. 19 取得))
- Rod, Ellis 2003 『Task-based Language Learning and Teaching』 Oxford University Press p. 277